

in and out

高木登

第 3 稿

07/19/25

登場人物

飯島真由美（45）

中野基子（43）

そこは旅館の一室である。

とある地方のとある町村。

真由美の実家がある村の隣にある。

飯島真由美と中野基子はつきあって十数年になるレズビアンのカップルである。東京でふたり暮らしをつづけていたが、真由美の父親の介護をしていた義理の姉が亡くなり、真由美にその任を引き継ぐという話が親戚内で起こった。その話し合いに参加するために帰郷したのである。

家族や親戚たちは真由美がレズビアンであることを知らない。

夜。

前説の時間があるならば、その途中で真由美役の俳優がアクティングエリアに登場し、開いた雑誌を顔に載せ、仰向けに横たわる。

そうでなければ――。

照明が点く。

雑誌を顔に載せて寝ている真由美。

そこへ基子が入ってくる。

基子 （実は寝ていないのを知っていて）ねえ。

真由美 ……。

基子 ねえ、やろう。

真由美 ……。

基子 イヤでもあしたなんだからやろうよ。

真由美 ……。

基子 いっしょにこっちへ越すんでしょ？ だったらやっとかないと。

真由美 ……。

基子 乗り越えなきゃいけないことなんだからさ、いっしょに乗り越えようよ。

顔に載せた雑誌を外し、ふいにムクツと起き上が

る真由美。正座する。

無言だが基子の言うとおりにしようという意味があるのがわかる。

正座する真由美の隣におなじく正座する基子。

真由美 ……こちら中野基子さん。

基子 （頭を下げる）

真由美 友だちっていうか……あの、兄さんね、いままで黙ってきてほんともうしわけないと思ってるんだけどね、やっぱりこういうことってなかなか言い出しにくくてね……できれば母さんにも生きてるうちに話したかったんだけどさ、どうしても言えなくってさ、わたしも後悔してて……いや、後悔ばっかじゃなくて、これで良かったんじゃないかとも思ってた……でもやっぱり後悔かな、いや、こういうことってね、当事者の間でもいろいろ考え方があってね、……

基子 前置き長すぎない？

真由美 順番であるじゃない、ものごとの。

基子 でも長い。

真由美 ほんのさわりでそんなこと言わないでよ。まだこのあといろいろ話さなきゃならないこと天こ盛りなんだけど。

基子　どれくらいあるの。

真由美　五分……七分とか、それくらい？

基子　……長いよ……単刀直入に話した方が良いと思う。先

に結論言って、それから説明の方が。

真由美　……目に見えるわけよ。どういうことになるか。

基子　どうなるの。

真由美　大騒ぎ？

基子　……悪く考えない。

真由美　あなたはうちの家族がどういう人たちだか知らないから。

基子　真由美のご家族なんだから、良い人たちなんだってことはわかってる。

真由美　わかってない。わかってないよ。ていうか、あなたのそういうところは危ない。危なっかしい。

基子　なんで？

真由美　前から思ってた。

基子　前にも言われた。

真由美　何度でも言う、危なっかしい。人を信じすぎ、良い方に解釈しすぎ、

基子　信じてるわけじゃないよ、

真由美 信じてるじゃない、

基子 だってイヤでしょ、自分が初めから不信感で見られたりするの。

真由美 それはそうだよ、

基子 それだけだよ。マナーっていうか、礼儀作法とか気遣いとか、そういうこと。

真由美 あのね、悪い人ってね、そういうことはぜんぶお見通しでね、人の善意につけこんでくるの、あなたのそういう態度はね、どうかだましてくださいつてアピールしてるようなもんなの、

基子 でも真由美のお兄さんは詐欺師とかじゃないわけでしょう？

真由美 ……そうだね。

基子 だったら良い人だって前提で考えないと。

真由美 ……でも、基子が考えてるほど良い人でもない。

基子 ……。

真由美 そこに危なっかしさがある。あなたが思いもよらい落とし穴がある、きつとある、そこにあなたが落ちるのが怖い、あなたが傷つくのが怖い。

基子 わたしはべつに傷ついてもかまわないけど。

真由美 わたしがいやなんで。あなただっていやでしょ、わたしが傷つくの。

基子 そうだね、でもわたし真由美が考えてるほど弱くないから。

真由美 わかってるよ。

基子 真由美のことも強い人だと思ってるし。

真由美 ありがとう。

基子 ただ真由美がね、自分のご家族や地元のことをね、ちよつと悪く言いすぎるのがね、引っかかってるだけ。

真由美 ……わたしね、おたくのご両親がわたしたちのこと理解してくれてるの、すごい感謝してるのね、

基子 うん、

真由美 それだけにね、わたしがうちの家族にわたしたちのこと話せてないのがもうしわけなくてね、

基子 それはほんと人それぞれだから、

真由美 だからね、

基子 ……。

またその場に横たわり、ふたたび顔に雑誌を載せて寝る真由美。

基子 え、なんで急に寝るの。

しばしそのままです、

真由美 ……あなたはわたしの家族を知らない。わたしの家族がどういう人たちだか、この土地の人がどういう人たちだか知らない。

基子 ……。

真由美 あなたは恵まれてるんだよ。だからそんなに優しいんだよ。

基子 それほどじゃないよ。

真由美 でもわたしはそんなに恵まれてないの。そこにあなたを巻きこみたくないの。

基子 巻きこんでよ。パートナーなんだから。

真由美 ……巻きこめない。

基子 ここまでわたしを連れてきたってことは、それなりに覚悟決めてきたってことでしょ？

真由美 ……決めてない。ずっと揺れてる。迷ってる。

基子 ……。

真由美 （突然起き上がって）わたしたちレズビアンです！

もう十年以上同棲してて結婚してるも同然なんです！

基子 ……。

真由美 何が起きると思う？

基子 ……そうだったんだ……って。

真由美 ……それで済めばこんなに悩まないって。自分の知
ってることからちよつとでもはみ出ると停まっちゃうの
よ。すべてが。なにかもが。兄だけじゃない。ここに
住んでる人たちみんなそう。ほんとそうなの。あなたの
ご両親みたいな人たちばかりじゃないんだ、この世の
中は。

基子 ……わかるよ。うちの父や母みたいな人ばかりだっ
たら戦争なくなると思う。

真由美 この世から戦争がなくならないのは、そうじゃない
人たちがけつこういるからなのよ。

基子 でも殺しあいにはならないでしょ？ お兄さんと。

真由美 ……。

基子 なるの？

真由美 ならないけど、血は流れるよ、（胸に手を当てて）
ここに。

基子 ごめん、わたし、あなたがけつこうネガティブだって

知ってるから、まだ信じられてないのね、バイアスかかってるんだろうなって思うから。

真由美 ……わたしさあ、高校のときにさ、クラスにビアンの子がいたのよ、友だちじゃなかったの、仲悪いわけでもなかったんだけど、ぜんぜん知らなくて。

基子 うん、

真由美 その子がクラスの子に告白したのね、それを告白された子がバラしちゃって、

基子 うわ、

真由美 ひどいんだ、もうレズ、レズって。

基子 うわー……

真由美 教師は放置、保護者も放置、そんでもってわたしも放置。

基子 ……。

真由美 ここにいるよ、わたしもそうだよって言えなかった。言える空気じゃなかった、言わなきゃならなかったのに言えなかった。見捨てたんだ、わたし、その子。怖くて。

基子 ……どうなったの、その子。

真由美 わからない。越してった。それっきり。

基子 ……。

真由美 その子がね、ひとこと言ったのよ、「なにが悪いの」って。それが忘れらんない。

基子 ……。

真由美 悪くないよって、いまでも言っただげたい。

基子 ……。

真由美 あのとときの空気を思い出すとね、この土地の人たちも、自分も信じられないのね……だから怖いの。

基子 ……。

真由美 この土地もいやだし、自分もいやだし……ここにいる自分がなんかもういやなの。逃げ出したいの。

基子 ……大前提としてね、本音としてね、お父さんの介護したい？

真由美 したいも何も親だし。しないと。

基子 お父さん、好き？

真由美 ふつうかなあ……まあ、きらいじゃなかったよ。

基子 じゃあ抵抗ないのね？

真由美 ない。

基子 だったらするしかないよね。

真由美 ……うん。

基子 いっそ隠す？ いままで通りで。

真由美 そうしたらね、たいへんよ。大量の縁談が持ちこまれるわけよ。男あまってんだから。みんな嫁ほしくて仕方ないんだから。この歳だって関係ないよ。言いよられまくりよ。目に浮かぶわ、ふたりしてぐったりしてるところが……だからわたしにはカミングアウト以外の選択肢が思いつかない。あなたとの生活を守るためには。

基子 ……正直ね、たいへんそうだと思ってるのは事実。

真由美 ……たいへんだよ。それは確か。

基子 でもあなたと一緒にいたい気持ちの方が強いし。

真由美 ありがとう、

基子 だからこっちに越す覚悟も決めたんだけど、

真由美 うん、

基子 ……。

今度は自分が仰向けに横になる基子。

見ている真由美。

やがて、

基子 あ。

真由美　　？

基子　なんか真由美が横になりたがる理由がわかったような気がする。

自分も雑誌を顔に載せてみる基子。

基子　……うん。わかる。わかったよ。

真由美　……。

基子　なんか時間が止まった感じするよね。

真由美　……。

基子の隣に並んで寝る真由美。

真由美　……言われてみればそんな感じる。

基子　このままこうしていられたらいいね。

真由美　そうだね……でも止まった感じするだけだからな

あ。

基子　感じだけでもするだけいい。

真由美　そうだね。

基子　めんどくさいから時間止まってほしい。

真由美 ほしい。

基子 止まらないかなあ。

真由美 ……。

基子 止まるといういろ楽だよね。

真由美 そうだね。

基子 たとえばうちの親が倒れたりしたらさ、どうなるの？

真由美 あなたとわたしで介護だよ。

基子 ここにいながら？ 最悪別居じゃない？

真由美 ……。

基子 それにわたしたちもさ、年取ったら介護してもらう立

場になるわけじゃない？ 誰がやってくれるの？

真由美 ……あなたが倒れたらわたしがやる。わたしが倒れ

たらあなたがやる。

基子 あなたがいなくなった後にわたしが倒れたら？

真由美 ……。

基子 ただでさえ不自由なのにたいへんだよね。

真由美 ……。

基子 年取るのってたいへんだね。

真由美 ……。

基子 年取りたくないね。

真由美 ……。

基子 このまま時間を止めたいね。

しばし沈黙するふたり。

やがて、

真由美 ……わたし、わかったよ。わたしもわかった。

基子 ……？

真由美 ……こんな時間がないんだよ。

基子 ……。

真由美 うちの家族も、地元の友だちも。こんな時間を過ごせる人がいないんだよ。

基子 ……。

真由美 ここにはわたしを受け入れてくれる時間が流れてないんだよ。

基子 ……。

しばし黙って仰向けのままのふたり。

やがて、真由美がおもむろに起き出す。

そして正座する。

基子、何ごとかと見て――。

真由美　兄さんね……いままで黙ってきてほんとにもうしわけないと思ってるんだけどね……できれば母さんにも生きてるうちに言いたかったんだけどさ、どうしても言えなくてさ……中野基子さん。

基子、起きて、真由美の隣に正座する。

そして会釈。

真由美　大学の友だちなんだけど、もう十年ちよっと前からいっしょに住んでんの。友だちって言ったけど、まあ友だちなんだけど……わたしたちつきあってんの。レズビアンなんです。わかるよね？　女同士で……結婚できないんだけど、結婚してるのとおなじ間柄なのね……そう……わたし、ずっとそうだよ……もう中学生の頃から……いわなかったただだから……ごめん、ほんと……だからさ……どっちが妻とか夫とか、そういうのないんで……

：だからね……笑って話すようなことじゃないから……
だから……やめてくれるかな……それってセクハラなん
だけ……！

基子 （小声で）悪く考えない。

真由美 （落ち着いて）そうだね……つい妄想に激怒してし
まった……落ち着く……

基子 （うなづく）

真由美 それでね、父さんの介護のことなんだけどね、わた
しも最初は前向きだったのね、父さん好きだし、義姉さ
んにもお世話になったし、兄さんの苦労考えると、わた
しが後を継ぐのが筋だなんて思ったし……それにさ、あ
んまり仕事上手くいってなくて、辞めたかったのよ。こ
のタイミングでこういう話になって……義姉さんには申
し訳ないんだけど、そういう運命なのかなって思った
し、彼女の親戚がたまたまこの近くにいてね、彼女の仕
事も見つかったしね、ふたりでこっち越して、あたらし
い生活始めようと思ったのね、でもさ、黙ってるわけに
もいかないと思ってさ、ごまかすのもいやだしね、女ふ
たりでぜったい変な目で見られるしさ、だからしつかり
お話しようって思って……

基子 （小声で）長い。

真由美 必要な長さだから。

基子 でも長い。

真由美 ……どう思ったかわかんないけど、そういうことなの。わたしたち結婚してるの。してないけどしてるの。すぐには受け入れらんないかもしれないけど、そういうことなの。でもこれはわたしの人生の選択なんで。真剣に考えた結果なんで。受け入れてほしいです。お願い。

指ついて頭を下げる真由美。

おなじようにする基子。

真由美 （顔を上げて）それでね、今日はいったんこっち戻ってきたんだけどさ、いろいろ考えちゃってね、父さん好きだしさ、兄さんも好きだしさ、お義姉さんにもかわいがってもらって感謝してるしさ、ほんと、わたし、いやな話だけど、父さんの最期看取るのは自分だって、そうするべきなんだろうなって、介護の話きたとき、すんなり受けとめられたっていうか、運命みたいなもんだって思ったしね、彼女にもこのこと前向きに話してさ、彼女も受け入れてくれてね、自分の終わりは故郷で迎えるんだろうなって、もうほんと本気で思ってたのね、なんならちよっと明るい気分にもなったの、あたらしい生活はじまるんだなってわくわくしてたの、でもね……

基子 ……。

真由美 ……でもね、こっち来たらさ、駄目なんだ。もうな

んていうかさ……甘かったなって思っちゃったんだ……
なにもかもがさ……自分がもうイヤでさ……わたし、ほ
んとの自分になりたくて東京に出たんだよ。ここじゃ自
分でいられないから東京に逃げたんだよ。なのにこっち
帰ってきたらさ、東京とおなじ自分でいられるわけない
じゃん、元にもどるんだよ、いろんなことが。身体から
もうもどってくるんだよ、むかしの自分に。捨てたつも
りだったのに、変わったつもりだったのに、ぜんぜん変
われてなかったんだなって、押しこめてただけだったん
だなって、心のなかのはしっこのはしっこに押しこめて
見ないようにしてただけだったんだなって、いろいろ気
づいちゃってさ……なんかもう、ここへ来る前の前向き
な気持ちじゃなくなっちゃったんだよね、このまま
だとわたし、なんかちよっとおかしくなるっていうか、
いやな人になるっていうか、とにかく自分でもあんまり
好きじゃない自分になりそうで、なんかいやんなっちゃ
ってね、それでちよっと混乱してんの。

基子 ……。

真由美 自分でもよくわかんないんだ。父さんも好き。兄さ
んも好き。義姉さんも好き。地元の人たちだってきらい
なわけじゃない。でもきらいなんだ。苦手なんだ。好き
だけどきらいなの。なんだかわかんないよね、でもそう
なの。わたし、考えた。これなんなんだろうって。で、

わかった。どっちもほんとなの。好きもきらいもほんとなの。だから悩むの。じゃあどうすればいいのかって：選ぶしかないの。どっちの自分がより良くて、より健全で、より充実して：選ぶなんてえらそうだけど、自分の人生だもん、選ぶしかないの：だから選ぶ。

基子 ……。

真由美 兄さん、ごめん、わたし父さんの介護できない、娘なのに無責任でごめん、でもお断りします。東京で彼女と生きる。

基子 ……。

真由美 親子の縁も兄妹の縁も切ってくれてかまいません、ていうか切ってください、切りますわたし、もうここには帰ってこないし、兄さんたちの顔も見ることはないです、わたしのことは忘れてください、わたしもこの家のことは忘れる、わたしには：わたしは、自分の家族をなくしても、彼女との生活を捨てることはできません。彼女につらい思いをさせたり、いやな思いをさせてまで、こっちに帰ってこれないです、すみません。

基子 ……。

真由美 ……長男だし、たいへんだよね：でもごめん、わたし兄さんのこと捨てる、だから兄さんもわたしのこと捨てて：捨てるよ：気持ちの問題なんだから：それだけなんだから：…。

基子 ……。

真由美 お集まりいただいてる皆さん、ごめんなさい。そんなわけですから、わたしのことはあてにしないでください。頼らないでください。わたしも皆さんを頼りません。今日かぎり親戚だとは思わないでください。勝手なことと言ってすみません、でもそうしてください。

基子 ……。

それは事前の練習なのか、現実におこなわれていることなのか——もはや観客には区別がつかない状況である。

真由美には、その場にいる人たちから多くの言葉が投げかけられているらしい。

それは主に真由美への非難の言葉である。

真由美、黙ってそれを受けている。

かなり酷い言葉がかけられているらしいのは、基子の様子を見てもわかる。

それでもしばらく黙って受けるがままの真由美。

やがて、だいぶ沈黙がつづいたあとで――。

真由美 ……なにが悪いの。

基子 ……。

真由美 なにが悪いんですか？

力強く、覚悟を決めた顔で告げる。

暗転。

(了)